

令和四年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その一)

注意

解答欄は問題用紙の(その八)(その九)(その十)にあります。

解答に字数制限のある場合、句読点なども文字数に数えます。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一二、一三世紀のヨーロッパに大学が誕生した最も重要な条件は、汎ヨーロッパ的に都市から都市へと渡り歩くことのできる移動のネットワークだった。このネットワーク上を、商人、職人、聖職者、芸能者、そして知識人が旅していた。

どこかの都市に、大変学識のある人物がいることがわかると、多くの学徒が何か月も旅してその都市に集まり学びの舎を形成した。やがてそうした都市の旅人たちは、地元の世俗権力の干渉を退けるため、学問の自由についての勅許をローマ教皇や神聖ローマ帝国皇帝から得て、教師と学生の協同組合、すなわち大学を形成していった。つまり、大学誕生の根底にあったのは、脱領域的な移動の自由であり、これこそが大学の自由の根幹をなすものだった。

だからやがて、この汎ヨーロッパ的な移動の自由が制限されたり、必要ではなくなったりしていくと、この第一世代の大学は衰退^bに向かう。そうした移動の自由が失われるのは一六世紀で、直接の要因は宗教戦争、それに続く領邦国家の形成だった。宗教戦争の結果、カトリックの支配域とプロテスタントの支配域の間に高い壁が生まれた。また領邦国家は、それまでのヨーロッパ大のネットワークを国家の壁で分断した。さらにそれ以前、一四世紀に起きたペストのパンデミックも移動の自由を困難にしたから、大学にダメージを与えたはずだ。

しかし、旅人たちの共同体だった大学に、ペスト禍による移動制限という以上に深いダメージを与えたのは、ペスト禍の一つの結果として生じていった技術革新だった。ペスト禍でヨーロッパの人口が激減し、あらゆる分野で労働力が不足する状況が生じていく。当然ながら、この状況は労賃を上昇させる。農業から手工業まで、雇用主は労働者により高い労賃を払わざるを得なくなり、この経営の窮状^cから逃れるべく、生産工程の合理化、機械化に取り組み始めたのである。このインセンティブは労働集約的な産業ほど強く、ここでは技術的イノベーション^dが起こる条件が整っていた。そして、中世の本作りはまさしくそうした世界^eだったから、そこで手工業から機械工業への大転換が生じてもおかしくはなかった。

こうして一五世紀半ば、マインツの野心的な金属加工職人だったヨハネス・グーテンベルクが活版印刷術を発明したのである。それは、人手不足の時代に起きていた様々な技術革新の一つであったが、この技術革新が知のあり方にもたらした変化は、数百年に及ぶ巨大なものとなっていく。つまり出版産業が、第一世代の大学^fに止めを刺すのである。大量の印刷された安価な書物^dが回るようになった一六世紀以降のヨーロッパでは、もはや何か月もかけて大学のある都市まで旅する必要性はなくなった。「ステイホーム」のままでも、必要な知識は印刷本を買い集め、それらを読み比べることで十分に得られるようになったのだ。

こうして移動の自由の時代が終わった先で浮上した一七、一八世紀の近代は、大学の時代ではなく、出版の時代であった。中世から近代までを通じ、知的創造の歴史は、一方では移動の自由に、他方では出版の自由に足場を置き、この二つの足場は対抗的に連鎖してきた。だから、大学と出版の間には連携^g関係と同時に対抗関係がある。

そして、長い周期で何度か繰り返されてきた感染症パンデミックは、何度も移動の自由を大幅に制限する動きを生じさせてきた。それは封鎖であり、隔離であり、監視であり、移動の禁止である。明らかに、この動きの延長線上に大学の自由はない。「新しい日常」が「大学の自由」と共存できるためには、単なる封鎖や監視とは異なる「移動の自由」への回路が、つまり越境や接触や対話の自由につながるもう一つの回路が見いだされなければならない。

令和四年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その二)

実際、コロナ禍の渦中でも、私たちはいくつものそうした越境と接触、対話に向かうグローバルな動きを目撃してきた。最も大きな流れは、オンライン化の急激かつ全地球的規模での浸透である。すでに論じたように、世界中のとてつもない数の人々が、わずか数か月でこのシステムに日々接する「新しい日常」に入っていた。

しかし、変化はそれだけではない。ヨーロッパでは、封鎖が最も厳しかった時期に、家々のベランダ越しに、広場や街路を挟んで人々が合唱し、メッセージを送り合い、中間地帯をコミュニケーション空間に変えていった。さらには人種差別に反対して膨大な人々が、世界中でマスクをしながら街路を行進した。いかなる時代であれ、民主主義も都市も大学も、単に「ステイホーム」しているだけでは守り切れないのだ。私たちはなお越境し、接触し、対話し、主張し続けなければならない。そうした集団的行為こそが、都市を実現し、大学を支えるのである。二〇二〇年の春、世界で起きたことは、そうした長い歴史が示してきた知的営みの根本を、人々が今も理解していることの証左である。

^⑤ところが、コロナ禍の日本で生じた現象は、世界の多くの国とまるで異なっていた。

(吉見俊哉『大学は何処へ 未来への設計』)

注*領邦……皇帝(王) 権の弱体化にともない諸侯が事実上の主権を行使した領域。

*インセンティブ……目標への意欲を高める刺激。

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

a 退(ける) b 衰退 c 窮状 d 安価 e 連携

問二 傍線部①「この汎ヨーロッパ的な移動の自由が制限されたり、必要ではなくなったりしていく」とあるが、「移動の自由」が「必要ではなくなった」原因を、本文中から四字で抜き出さない。

問三 傍線部②「そうした世界」とはどのような世界か、三十五字以内で答えなさい。

問四 傍線部③「第一世代の大学」とあるが、筆者によるとそれはどのようなものであったのか、これ以前の本文中から十字以内で抜き出さない。

問五 傍線部④「単なる封鎖や監視とは異なる『移動の自由』への回路」とあるが、それはどのようなものであると筆者は述べているか、二点に分けてそれぞれ二十五字以内で答えなさい。

令和四年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その三)

問六 傍線部⑤「ところが、コロナ禍の日本で生じた現象は、世界の多くの国とまるで異なっていた。」とあるが、筆者はこのあと文章を続けて、「コロナ禍の日本で生じた現象」を通して、日本社会のあり方を論じているが、次の選択肢のなかで、本文の内容と明らかに矛盾していることを述べたものを、一つ選び記号で答えなさい。

- ア コロナ禍の第一波をあたかも日本社会が乗り越えたかのように見えたのは、コロナ対策が必要とした「ソーシャル・ディスタンス」や「ステイホーム」と、そもそも「外」と「内」を区別する壁を立てがちな日本社会の特性が容易にシンクロしたからである。
- イ 感染リスクから同じように「ステイホーム」が叫ばれたなかで、日本でも移動を禁じられた異なる人々がなおコミュニケーション空間を確保しようと努め、同調圧力に抵抗し続けることによってさまざまな方向に向かおうとしていた。
- ウ 「自粛」という言葉の奇妙さには、日本社会における個人の自己選択・自己決定のあり方を、その社会がどのように理解しているのか、いわば主体をめぐり、その社会が共有する知識の違いが、ここに示されているのである。
- エ コロナ禍の日本を覆っていたこの「自粛」の政治を作動させていたのは「世間」である。「世間」観念の起源は古く、古代日本社会にも存在したらしい。この古くからの「世間」の力学が、近代化を経ても残存し、コロナ時代の日本でも強力に作動している。
- オ 「世間」は、家族や地域、職場での日常的な営みやコミュニケーションのなかに実効的な観念として常に作動しており、人々はこれを社会的に存在している所与の事実として受けとめ、常に意識しないと生きていけないような状況におかれ続ける。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

馬車の中にはお婆さんが五人居眠りしながら、この冬は蜜柑がハウネンだという話をしていた。馬は海の鷗を追うかのように尻尾を振り振り走った。

馭者の勘三は馬を大変愛している。その上、八人乗りの馬車を持っているのは、この街道で勘三一人だ。また彼はいつも自分の馬車を街道の馬車のうちで一番綺麗にしておく程のシンケイシツだ。坂道へさしかかると彼は馬のために馭者台から【A】下りてやる。この【A】下りて【A】乗る身振りがいかにもケイカイであることを、内心得意に思っている。また彼は馭者台に坐っていても馬車の揺れ工合で、子供が馬車のうしろにぶら下ったことを感づけるので、【A】身軽に飛び下りて子供の頭へこつんと拳骨を食らわせる。だから街道の子供たちは勘三の馬車に一番目をつけているが、また一番恐れている。

ところが今日は、どうしても子供が捕まらないのだ。つまり、猿のように馬車のうしろにぶら下っている現行犯を取り押えることが出来ないのだ。いつもなら、彼は【A】猫のように飛び下りて馬車をやり過し、知らずにぶら下っている子供の頭へこつんと拳骨を食らわせて、得意気に言うのだ。

「(B) (め。)」

彼はまた馭者台を飛び下りてみた。これで三度目だ。十二三の少女が頬を真赤にジョウキさせてすたすた歩いている。肩で刻むように息をしながら眼がきらきら光っている。しかし彼女は桃色の洋服を着ている。靴下が足首のあたりまでずり落ちてしまっている。そして靴を履いていない。勘三がじっと少女を睨みつける。彼女は横の海に目をそらして、たったたつと馬車を追って来る。

令和四年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その四)

「チエツ！」

勘三は舌打ちして馭者台に帰った。ついぞ見慣れない高貴に美しい少女は海岸の別荘にでも来ているのだろうと思つて勘三は少し遠慮していたのだが、三度も飛び下りてもつかまらないから腹が立ったのだ。もう一里もこの少女は馬車にぶら下つて来ているのだ。それがいままじいばかりに勘三は大変愛する馬を鞭打つてさえ走つたのだ。

馬車が小さい村に入った。勘三は高らかにラッパを吹いてますます走つた。うしろを振り返ると、少女が胸を張り断髪を肩に振り乱しながら走っている。片一方の靴下を手をぶら下げている。

間もなく少女が馬車に吸い附いたらしい。勘三が馭者台のうしろの硝子越しに振り返ると、つと少女の身を縮めるケハイが感じられた。しかし勘三が四度目に飛び下りた時には、もう少女は馬車から身を離れて歩いている。

「おい。どこへ行くんだ。」

少女はうつむいて黙っている。

「港までぶら下つて来るつもりか。」

矢張り少女は黙っている。

「港か。」

少女はうなずいた。

「おい、足を見な、足を。血が出るじゃないか。剛気な小女郎だな、え、お前さん。」

さすが勘三は顔をしかめた。

「乗つて行ってやるよ。中へ乗つかつてくん。そこへぶら下ると馬が重いからよ、頼むから中へ乗つてくん。おらあ間抜けにはなりたくねえ。」

そう言つて馬車の扉を開いてやった。

しばらくして勘三が馭者台から振り向いて見ると、少女は馬車の扉に挟まれた洋服の裾を取ろうともせず、さっきの勝気な顔色は消えてしまつて、静かに恥かしかつてうなだれていた。

ところが、そこから一里の港へ行つての帰り道に、どこからともなくまた同じ少女が馬車を追っかけて来るのだった。

もう勘三は素直に馬車の扉を開いてやった。

「おじさん、中へ乗るのは厭なんだもの。中へ乗りたくはないんだもの。」

「足の血を見な、血を。靴下が赤くなつてるじゃねえか。凄、小女郎だなあ。」

二里の上りをゆるゆる馬車はもとの村へ近づいた。

「おじさん、ここで下ろして頂戴。」

勘三がふと道端を見ると、小さい靴が一足枯草の上に白く咲いていた。

「冬でも白い靴を履くのか。」

「だつてあたし、夏にここへ来たんだもの。」

少女は靴を履くと、後をも見ず白鷺のように小山の上の感化院へ飛んで帰つた。

(川端康成「夏の靴」)

注*感化院……児童自立支援施設。非行少年、保護者のない少年、親権者から入院出願のあつた少年などを保護し教育するための福祉施設。

令和四年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その五)

問一 波線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

- a ホウネン b シンケイシツ c ケイカイ d ジョウキ e ケハイ

問二 本文中の空欄【A】(五箇所ある)には同じ語句が入ります。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア するりと イ ふわりと ウ ひらりと エ のそつと オ くるりと

問三 本文中の空欄(B)に入る語句を本文中から三字で抜き出しなさい。

問四 傍線部①「しかし彼女は桃色の洋服を着ている」と逆接の接続詞が使われているが、このときの勘三の思いを本文中から三十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を書きなさい。

問五 傍線部②・④の「馬車の扉を開いてやった」ときの勘三の心情として最も適当なものを、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ② ア 腹立ち イ 思いやり ウ 根負け エ 誠実さ オ 依頼心
④ ア あきらめ イ 実直さ ウ あこがれ エ 素直さ オ 異常さ

問六 傍線部③「さっきの勝気な顔色は消えてしまつて、静かに恥かしがつてうなだれていた」とあるが、ここから少女のどのような心情を読み取ることができるか。簡潔に書きなさい。

問七 語り手の、少女を見つめる温かいまなざしが感じられる箇所を、本文中から二十字(句読点を含む)で抜き出しなさい。

問八 本文の作者である川端康成の作品の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 羅生門 イ 細雪 ウ 歯車 エ 雪国 オ 舞姫

令和四年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その六)

三 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

近ごろ、帰朝の僧の説とて、ある人語りしは、唐に賤しき夫婦あり。餅を売りて世を渡りけり。夫の道の辺にし

宋から帰朝した僧の話として

夫が道端で

て餅を売りけるに、人の袋を落したりけるを見れば、銀の軟挺六つありけり。家に持ちて帰りぬ。

妻、心すなほに欲なき者にて、「我らは商うて過ぐれば、事も欠けず。この主、いかばかり歎き求むらん。いとほし

生活にも不自由はありません。

き事なり。主を尋ねて返し給へ。」と言ひければ、「まことに。」とて、普く触れけるに、主と言ふ者出来て、是を得て、

本當にそうだ。

言い広めたところ

あまりに嬉しくて、「三つをば奉らん。」と言ひて、既に分つべかりける時、思ひ返して、煩ひを出さんが為に、「七

すでに分つべかりける時、

わづら煩ひを出さんが為に

つこそありしに、六つあるこそ不思議なれ。一つは隠されたるにや。」と言ふ。「さる事なし。本より六つこそありしか。」

と論ずる程に、果ては、国の守の許にして、是を断らしむ。

③

国の守、眼賢くして、「この主は不実の者なり。この男は正直の者。」と見ながら、不審なりければ、かの妻を召

まなこさかし物事を見分ける力が優れ

して別の所にて、事の子細を尋ぬるに、夫が状に少しもたがはず。「この妻は極めたる正直の者。」と見て、かの主、

言い分

不実の事確かなりければ、国の守の判に言はく、「この事、確かの証拠なければ判じがたし。但し、共に正直の者と見

判決

えたり。夫妻また詞変らず、主の詞も正直に聞こゆれば、七つあらん軟挺を尋ねて取るべし。是は六つあれば、別の

④

人のにこそ。」とて六つながら夫妻に給はりけり。

宋朝の人、いみじき成敗とぞ、普く讚めののしりける。心直ければ、自ら天の与へて、宝を得たり。心曲れば、冥

素晴らしい裁決

目に

のどがめにて、宝を失ふ。この理は少しも違ふべからず。返す返すも心淨くすなほなるべきものなり。

見えない神仏のどがめによって

『沙石集』

注*銀の軟挺……良質の銀をうち延ばしたるもの。

令和四年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その七)

問一 傍線部①「是」とあるが、何を指すのか、簡潔に答えなさい。

問二 傍線部②「思ひ返して」とあるが、主語として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 帰朝の僧 イ 銀の落とし主 ウ 銀の拾い主(夫) エ 銀の拾い主の妻 オ 国の守

問三 傍線部③「是を断らしむ」とあるが、どのようなことを言うのか、次の中から最も適当なものを記号で選びなさい。

ア 拾い主に銀を三つ差し上げると言ったのに、その約束を破った落とし主を断罪せよということ。
イ 銀は七つあったのに、一つごまかして自分のものにした拾い主の罪を断罪せよということ。
ウ 七つの銀のうち、三つ渡したはずなのに、六つあるのは不思議で判断しかねるということ。
エ 銀を一つ隠してしまったのは、落とし主か拾い主か、判断させようということ。
オ 落とし主と拾い主と、そのどちらの主張が正しいか、判断させようということ。

問四 「国の守」の判決では、傍線部④「是は六つあれば、別の人のにこそ」と述べて、拾われた銀は、落とし主の銀ではなく、「別の人」の銀であるとしています。次に示す文の空欄に適当な十五字以内の語句を補い、判決理由の説明となるようにしなさい。

*銀七つ落とし主としたという主張と、銀六つ拾ったという主張は() ()ので、銀六つは落とし主とは別人のものと考えられるから。

問五 この話は、説話集『沙石集』に収められている話の一つである。次の文の空欄に古文中の漢字二字の熟語を抜き出し、話の内容に合う題にしなさい。

() ()にして宝を得たる事」

受験番号

令和四年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その九)

二

問一
a
b
c
d
e

問二

問三

問四
最初
最後

問五
②
④

問六

問七

問八

